● 制作

同じ木陰で

―包摂的な社会を推進する都市公園のデザイン提案―

Living Happily Under the Same Shade of Trees

-Proposal for urban park design to promote inclusive society-

陳 子瑩 園芸学研究科 ランドスケープ学コース 環境造園デザイン学領域(主指導教員:木下 剛) CHEN Ziying

1. 研究の背景と目的

日本における路上生活者の数は、厚生労働省 2023 年 1 月に実施された全国概数調査によると、全国は 3,065 人である。2002 年「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」(ホームレス自立支援法)が公布・施行されて以来、その数は大幅に減少した。

しかし、これは公園や河川敷などで路上生活を送っている 方だけの人数であり、いわゆるネットカフェやファストフー ド店などに寝泊まりされている方など、路上生活の危険が高 い、目に見えない路上生活者は含まれていない。

路上生活者の支援ため、多くの社会資源が投入されてきたが、それでも依然として、数千人単位の人がいることに変わりはない。特に2020年以降は、新型コロナウィルスによって、これまでとは異なった事情・流れで路上生活状態になる人も増えることがある。

原因としては、路上生活者が直面する核心的な問題を無視されている一社会地位の弱体化と社会のサポートの欠如である。不備な福祉制度と排他的な主流の社会風土が、彼らが普通の生活に戻ることをさらに難しくしている。近年、路上生活者の高齢化と長期化の傾向が見られる。

本制作は、デザインを通じて、経済、心理、社会などのア プローチから路上生活者が自信を持ち、自立を支援する。多 方面の社会交流を促進し、偏見を徐々に解消し、公園を起点 として、全社会包摂のさらなる発展を推進する。

2. 研究の対象地

研究の対象地は東京都豊島区区立の都市公園東池袋中央公園である。面積は5993.61m2。池袋駅徒歩10分、東池袋駅徒歩5分。多数の高層ビルに囲まれ、繁華街における、貴重な都市オアシスだ。

豊島区は、国際アートカルチャー都市構想の基本コンセプトである「まち全体が舞台の、誰もが主役になれる劇場都市」の実現に向け、池袋駅周辺の4つの公園の整備を進めてきて、「回遊向上エリア」を作った。

東池袋中央公園も「回遊向上エリア」に位置するが、公園は開園から数年が経過してもリニューアルが始まらない。南

池袋公園から東池袋中央公園に居場所を変えた路上生活者と 共に、このにぎわいの輪に取り込まれておらず、急速な都市 開発の波に取り残されているようだ。

2021 年以前、公園内にあった路上生活者のテント村住民が野良猫を世話していたため、30 匹以上の猫が集まり、公園は猫公園として有名になった。2021 年、20 年以上続いた豊島区のテント村は終了となった後、公園に8 匹の猫が残り、地域猫として、ボランティア、地域住民と行政により見守られている。しかし室外に生活することは猫たちにとって大変だ。

現在公園には、TENOHASIというNPO団体による、路上生活者・生活困窮者向けの炊き出しなどの支援活動が、毎月三回の土曜日に行われている。その際、公園スペースの半分以上がスタッフと生活困窮者約500人の行列に占拠され、一般市民は公園をほとんど利用できない。また、公園内には風雨をしのげる施設がなく、炊き出し活動は天候に大きく左右される。

3. 研究の方法

文献調査と現地調査を通じて、公園の既存の問題点を明らかにし、公園内に各種類利用者の利用実態を把握し、公園に対するの利用者ニーズを分析することで、設計の基礎を築く。

3-1. 文献調査

文献調査を通じて、路上生活者の生活実態を理解し、苦境 を明確にし、現状から抜け出しにくい原因をまとめ、異なる 生活現状とニーズに基づいて、よりターゲットを絞った対策 を提案する。

3-2. 現地調査

① TENOHASI へのインタビュー

TENOHASI のホームページと、先行取材レポートの内容に基づいて、TENOHASI の理事さんにインタビューを行った。インタビューを通じて、公園や路上生活者の歴史を理解し、NPO 側から公園リニューアルに対するビジョンを明らかにすることができた。

② 一般市民へのヒアリング

公園内に滞在している一般市民への簡単な訪問を通じて、

一般市民側からの公園に対する評価と、改善を望む問題点を理解する。

③ 観察

2023 年 11 月 15 日 (水)、2023 年 12 月 16 日 (土)、 2024 年 1 月 9 日 (火)、公園内のすべての訪問者を観察・記録することで、平日および支援活動の時における公園利用者のさまざまな活動の時間的・空間的分布をまとめた。

4. 研究の結果

4-1. 路上生活者の現状

- ① 高齢化と長期化が進んでいる。
- ② 「仕事」に関連する問題が路上生活の主因となっている。

新しい仕事の機会を提供することによって、自立のための経済基盤を築き、社会参加を向上させることが必要だ。

- ③ 家族との連絡を絶ち、さらには家族がいない状態で、 社会的サポートが欠如している。
- ④ ほとんどは、行政が提供する支援制度について知識がなし。制度の宣伝が行き届いておらず、必要とする人に確実に見られていないことを示している。
- ⑤ たとえ支援制度を知っている場合でも、半数が利用していなかった。自尊心が高い、他人への信頼の不足など、複雑な理由から、現状を脱する意欲が低い。路上生活者の心を癒すこと、包摂的な社会の雰囲気の作ることにも注目すべきだ。

4-2. 公園の利用状況

日常公園利用者の活動種類と、活動の時間的・空間的分布 を下図(図1、図2)に示す。

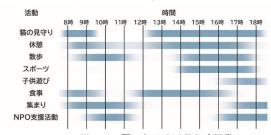


図1 公園における活動と時間帯

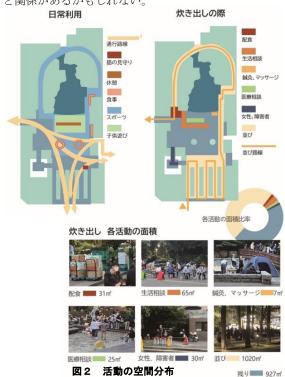
4-2. 問題点

活動の時間的・空間的分布を分析すると、以下の問題点を 発見することができる。

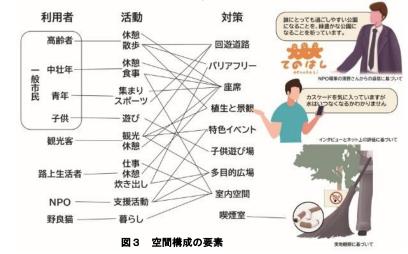
- ① 炊き出しの際、公園は大混乱の状態になるため、適 切な動線の配置と同時に多様な人々のニーズを満た すための多機能なスペースが非常に必要である。
- ② 食事をするのに便利な施設が必要である。
- ③ 公園をしばらく歩いている人が多く、公園が観光客 に魅力的ではなく、人々をここに残す景観や施設が

欠けていることを示している。

④ 公園は夕方になると人が増え、子供を連れてくる人 も増えるが、暗くなると人が少なくなる。照明不足 と関係があるかもしれない。



現地観察と市民側、NPO側の意見を総合し、公園における さまざまな利用者のニーズを分析し、公園内に増設及び改善 すべき空間構成の要素を導き出した。



引用文献

- 1. 厚生労働省(2022年4月26日)ホームレスの実態に関する全国調査(生活実態調査)
- 2. 村上鈴佳・河端里咲・中島宇将・岩谷桃佳・北野泰雅・岡直樹 (2018) 「路上生活者における社会的排除の現状-阪市西成区の事例より - | WEST 論文研究発表会
- 3. 砂脇 恵 (2018) 「ホームレス支援における「みまもり」の意義― 権利擁護の観点から―」

(主查:武田史朗,副主查:[木下剛],岩崎寛)

対象地一東池袋中央公園

東京都豊島区東池袋3-1-6に所在する豊島区立の都市公園,面積は5993.61m2。 JR池袋駅の東側に位置し、徒歩10分、東京メトロ有楽町線東池袋駅徒歩5分。



公園は都市の繁華なエリアに位置し、貴重な小型都市 オアシスである 周辺には多くの人が集まり、人々の構成が豊富で属性が

複雑で、交通が便利

豊島区は、「まち全体が舞台、誰もが主役になれる劇場都市」の実

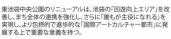
サンシャイン広場

1

東池袋中央公園 スペイン階段

東池袋中央公園も上記の「回遊向上エリア」に位置する。しかし 第28世代大公園でしたが日本部により7日に加まっる。しかし、 開園から数年が最適してもまだりニューアルが始まっておらず、 南池袋公園から東池線中央公園に居場所を変えた路上生活者と 共に、このにぎわいの輪に取り込まれていなくて、急速な都市開 発の波に取り残されているようだ。

現に向け、池袋駅周辺の4つの公園の整備を進めてきて、回游性 向上エリアを作った。







過去 30匹以上の猫が集まり、猫公園として有名になりる これは、公園に住んでいた路上生活者がわずかな 収入で猫を世話していたため _ 2021年以降、公園内の猫は激減した 8匹の猫が公園内に住んでいる

公益団体

特定非営利活動法人 TENOHASI

自立支援

池袋を拠点に、路上生活、生活困窮状態にある方に炊き出し、夜回りを通じて 出会い、つながり、安心できる生活を取り戻すためのお手伝いをしています。

活動種類		場所	時間
炊き出し	配食 生活相談 医療相談 鍼灸、マッサージ	東池袋中央公園	毎月第2/4土曜日 17:00~
衣類配布		東池袋中央公園	毎月第1土曜日 10:30~
*ほっと友会		東池袋中央公園	毎月第4土曜日 18:00~
夜回り		池袋駅周辺	毎週 水曜日 21:00~
*现在, ほ	っと友会は休止中で、再	間の予定がある	*



問題点

まず、炊き出しが行われているときは、公園 スペースの半分以上がTENOHASIのスタッフ と生活困窮者約500人の行列に占拠され、一般市民は公園をほとんど利用できなかった。

た、公園内には風雨をしのげる施設がなく、 き出し活動は天候に大きく左右される。

地域猫活動とは、猫の世話をする ボランティア、地域住民、行政の三者の協 ボランティア、地域住民、行政の三者の協力により、地域猫として3つのルールのもとで、飼い主のいない猫を一代限り地域で 見守るという活動です

地域猫活動





問題点

猫は室内での生活に適している動物。 見守る地域住民がいるが、はけがや病気 のリスクもあり、屋外で雨や雪にさらさ れ、冬を越えることは彼らにとって非常 に大変だ。

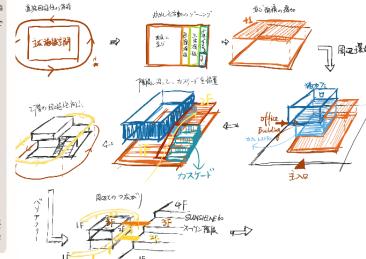
提案

公園内に立体的で多機能な建物を建設し、その一部を「野良猫カフェ」として活用することで、 公園に存在する生命体のすべてを両立させることができる。



デザイン手法

- まず、立体方向の階層を増やすことによって、建築空 間をできるだけ小さな敷地面積にして、できるだけ多 くのニーズを満たして、そして公園既存の回遊性ルー トを残す。
- 第二に、スカイウォークを通じて、公園観光ルート上 の面白さを増やし、公園と周辺商業施設のつながりを 強化する。
- ③ 第三には、形を変えたカスケードとメインエントラン スに植栽されたラクウショウ など、一部現存の景観 を残すことで、新しい景観を増やすとともに、地域住 民の公園に対する違和感や排除感を軽減することを期 待している。







同じ木陰で

木陰とは、実際的な木陰だけでなく、包摂的な雰囲気も意味している。

公園内に猫カフェを作ることで、各種類の利用者間のコミュニケーションを 促進し、偏見を徐々に取り除き、より包摂的な空間を作り出し、路上生活者、 公益団体、野良猫、一般市民など、すべての生命が同じ木陰で幸せに暮らせ るようにする。

そして、公園が包摂的な雰囲気の解放点となり、地域全体、さらには社会全体が徐々に包摂になっていくことも期待している。



